

## 会員の広場



### ふと立ち止まって感じること

茨城キリスト教学園・大学 資料センター課長 岡田 貴子

2012年もうすぐ幕を閉じようとしています。昨年の今頃は、東日本大震災からの様々な問いかけに何とも応えようのない、閉塞感にとらわれていたように記憶しています。寒さに向かい、住むこと、食べること、会話を交わすこと、の不十分さに直面しておられる方々に対して、何もできないもどかしさをひしひしと感じておりました。そして、今は二度目の冬を迎えます。被災された皆様はどうされておられるのでしょうか。本学園がある茨城県も被災地です。津波、家々や塀の崩壊、液状化現象、川の逆流、暗闇、水や食料、ガソリンや灯油の供給が出来ないなどの日々をしばらく続けましたが、今は落ち着いてた生活に戻っています。同じような経験をしている者として、私たちは何が出来るのかをいつも問います。動物が好きな私は、福島県や仙台市などの動物支援センターに食糧などを送ることくらいしか出来ていません。もっとお役に立ちたいと思いながら、不十分なことしかできないのがつらいところです。

茨城キリスト教学園・大学は、東北から続く太平洋がよく見える、阿武隈山系の東の端、日立市にあります。晴れた日には、はるかかなたまで、もしかしたらアメリカまで、見えるのではと思えるような、平和で素敵な太平洋を、疲れた時など眺めています。本学園は、戦前から日本にいたアメリカ人宣教師たちが戦後困窮している日本に何が出来るか、という熱い思いから設立されました。創立者たちは、何もない、田舎の原っぱであった当時のこの土地を選び、木造校舎から学園を始めました。写真を見たり記録を読んでもみると、当時の学生たちは自由で、自主独立に活動し、その表情には誇りが溢れています。学園創立から60有余年が経ちました。創立者たちは、地域との関係を大事にしてきました。学園の精神は、隣人愛に生きることにあり、「求めよ、さらば与えられん。たたけよ、さらば開かれん。」を多方面で実行しています。

日本の地域社会は、経済を中心にして大きく変貌を遂げてきています。その変化は、日本の国としての変化を反映していると言えるでしょう。その経過の中で、地域社会の様々な良き伝統も失われていますし、伝承も失われつつあるようです。老若男女を問わず、生き方の基軸も不確かで、何をどのように信じて、事にあたり、解決をし、前に進めば良いのか、混沌としすぎて、何だか何かを見失ってしまっているような人も多いように思います。私は青少年の育成問題に関心があり、そうした活動に携わってきました。青少年は、実に様々な課題に立ち向かっています。成長期に解決できなかった問題を抱えたまま社会に出てしまい、途方に暮れている

人達もいます。十分な体験一遊び、自然、危険、友人との交流、失敗、成功一などなどを経ないまま大人になってしまい、後から続く子どもたち、また先輩の大人たちとの交流に躓き、何を元に行動してよいのか不安を感じている人たちが多数おられます。

この点からも、本学の建学の精神を地域社会に広げていく活動は大事です。その精神は、生涯学習の機会の提供、地域や他の教育機関との連携・協働、地域の方々との交流、海外との交流などの中に脈々と活かされていることは間違いありません。特に大学では、地域連携センターを設け、組織的に大学開放講座を提供しています。語学、教養、こころ・いのち、教育、健康、地域文化、子どもというような分野で、地域の人々のこころのニーズに応えた講座を開いています。センターの活動を通して、大学が地域の受講生と共に歩むことが大切なことなのです。学生も自分でできることで地域のことに貢献しています。「まちおこし」や地元のフェスティバルへの参加など、多方面で地域に入り込んでいますし、大震災の被災者への支援も継続的に行っています。



初期の学園風景



茨城キリスト教学園は、  
キリスト教の精神に基づき、  
謙虚に真理を追求し、  
公正を尊び、真の隣人愛をもって  
人と社会に進んで奉仕し、  
人類の福祉と世界の平和に貢献する  
人間の育成を目的とする。

私個人としてはボランティアとして、地域の青少年の健全育成にかかわるさまざまな活動に参加してきました。具体的には青少年の体験活動の支援、小学生から社会人一緒の会議や体験活動の実施などで、他分野の方々と共に協力しながら取り組んできました。こうした事業にかかわるためには、様々な研修会、研究会、講座などに参加し学習してボランティアとしての考え方やスキル等を学んでいくことが不可欠です。全日本大学開放推進機構に参加しているのも、そうした活動をよりよく企画し実践できるように自己学習をしたいと思うからです。ボランティアをする人、それを受ける人、両方とも人間的に成長していきます。これらの事業には、事業活動での体験を踏まえ、成長したのち自ら事業に協力する人達が出てきます。そうした人たちが見られるのは、とても嬉しいことです。

生涯学習は、これまで主に成人の学習機会として理解されてきたように思います。大学開放もそうです。受講する人たちの年代を見ると、中高年の方々が多く、その中には学ぶ機会が十分に開かれていなかった時代に育った方もあり、そうした方々が学びを機会を活かされているのは尊いことと思います。現在は、さまざまな学びの機会が開かれるようになりました。そうした中で重要なことは何か。私のボランティア活動の実践から言えることは、生きる上での規範、生きる力、意味などを見失っている青少年や大人への支援であるということです。青少年は次の社会を担っていく人たちでありますし、大人は子育てを実際に担当している方々です。この人々を対象にして、生きる規範を考えるような講座を増やしていくことが必要だと思っております。

なぜそんなことを云うかという、これまで培われた伝統、技術、知恵などが家庭や社会から伝えられず、またよって立つ生きる指針などがはっきり自分の中で確立していない状態で、またそうしたことを学習する機会もあまり与えられないで、子育てや社会問題としての高齢者問題とか社会的弱者などの身近な問題に、どのように対応していいかよいか分からず迷っている善意の人々もあるからです。また、こうしたことに関心が薄いがために、間違いを犯す人たちも増えているような気がするのです。大学、公民館をはじめとする社会教育施設、各種地域団体は、様々な年代の人々のニーズに応じて学習する機会を提供できるよう連携していかなければなりません。大学は、人材、施設、設備を整えていますから、そうした連携の核になることができると思います。

---

### 岡田 貴子 ( おかだ ・ たかこ )

1968年、関東学院女子短期大学英文科卒業。日本リーダーズダイジェスト社勤務を経て、1969年から茨城キリスト教学園勤務。総合施設モデル事業、地域連携推進室の立ち上げ、国際交流、学生ボランティア支援隊の創設、日立市まちの活性化事業、生涯学習、同全国フェスティバル、技能五輪・アビリンピック、県民大学等に参画。現在は、学園の歴史の取りまとめ、特にアメリカとのやり取りの記録読解に取り組む。茨城県子ども会専門員、水戸生涯学習センター運営協議会委員、茨城県生涯学習・社会教育研究会、水戸市社会教育委員、同博物館運営協議会委員、水戸市青少年育成推進会議青少年社会参加部、水戸市青少年相談員等の社会的活動に参加している。全日本大学開放推進機構会員。